

| | |
|---------|-------------------|
| 氏名(本籍) | 鈴木康文(富山県) |
| 学位の種類 | 博士(文学) |
| 学位記番号 | 博乙第2001号 |
| 学位授与年月日 | 平成16年2月29日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第2項該当 |
| 審査研究科 | 人文社会科学研究科 |
| 学位論文題目 | フッサール研究：世界と身体の現象学 |

| | | | |
|----|--------|--------|-------|
| 主査 | 筑波大学教授 | | 水野建雄 |
| 副査 | 筑波大学教授 | 博士(文学) | 河上正秀 |
| 副査 | 筑波大学教授 | 文学博士 | 笹澤豊 |
| 副査 | 筑波大学教授 | | 竹村喜一郎 |
| 副査 | 筑波大学教授 | 博士(文学) | 谷川多佳子 |

論文の内容の要旨

本論文は、フッサールの世界論を身体論を通じて探求する研究である。研究方法は、フッサールの初期(1900年代)から最晩年(1930年代後半)にいたるまでの思想変遷を年代順に読みとることによって、分析の自己修正と深化を明らかにするという方法をとっている。その際に、彼の方法論である現象学的還元を展開をそのつど確認しつつ、現象学の学としての位置づけと自己根拠の問題をもその方法論を通じて明らかにしていく試みを行なっている。このような課題と方法に基づき、本論文は全五章と序および結から構成されている。

第一章では、フッサールが現象学的還元を導入した初期(1900年代)を中心に『現象学の理念』および『物と空間』を主要テキストとして、この時期に確立された現象学的還元の概略と、それに基づいて、主題である身体および世界概念がもつ基本的特徴を明らかにしている。

本章ではとくに、フッサール身体論の特徴を示すキネステーゼ感覚に着目している。キネステーゼ感覚は、感覚与件のように呈示された対象の内容として把握されるのではなく、機能として呈示を可能にする感覚である。この感覚によって、いわゆる均一な空間がいかにか構成されるか、またその空間内に自己の身体がいかにか位置づけられ構成されるかなどが明らかにされる。第一章では、1900年代フッサールが抱えていた諸問題や彼自身が暗黙のうちに前提としていた点を浮き彫りにすることに重点を置かれ、この問題点をフッサールがどのように捉え解明したかを、以下の第2章以降で明らかにしていく。第二章および第三章は1910年代のフッサールを取りあげる。

第二章は、『イデー I』を中心にして現象学的還元、およびそれにより開示される純粹意識の構造を扱っている。まず現象学的還元を通して純粹意識の構造を分析し、意識の流れからヒュレーの意義、ノエシス・ノエマ論、さらには直観と認識の成立に至るまでを明らかにする。さらに意識の構造を見通すために、対象の知覚ばかりでなくその変様を探ることによって、現象学的還元は意識構造のなかで、定立的意識一般に対応する中和性変様に基づいていることが示される。これにより第一章で指摘された現象学的還元の方法上のあいまいさが乗り越えられ、またノエマ論からノエマの多重性を解明して、対象そのものという意味の不明

確さを克服し、それがカント的な意味でのイデーであることを明らかにしている。

第三章では、『イデーⅡ』を主要テキストにして、第一章でなされた身体論の分析を発展させ、身体にかかわる諸問題が考察される。まず、『イデーⅠ』と『イデーⅡ』の構造的な錯綜について、両者を通底する枠組みを予備的に考察した上で、自然主義的態度、自然的態度、人格主義的態度、あるいは現象学的態度といった、学的態度と学問領域の関わりを明らかにする。これによって自然科学に対する精神科学の位置づけと、その精神科学のなかでの現象学の独自性を示して、現象学の学問としての自己規定を明確にしている。

以上をふまえて、この時期の身体論の特徴が、とくに身体自身の自己構成（心理物理的な構成）をキネステーズとヒュレーとの相互連関から論じられる。ここでは心理的な特質を示す局所付け（というノエマ）を分析の中心にすえて、物構成と身体の局所付けの構成の同時的構成、身体が物であり心でもあるという二重性の問題が分析される。

また、身体を構成する純粹自我の能動性と受動性といった二重の機能の問題、純粹自我がその自己構成として自己解釈した人格概念の成立、さらに、このような自我を巡る錯綜した枠組みが動機付けの面から解明される。そして最後に、この時期のフッサールが、世界を物の総体であるとみなす見解に限界を感じていたものの、それを乗り越えるまでにはいっていなかったことが示される。

第四章では、発生的現象学へ向けての方法論とその具体的な事象分析を明らかにする。1920年代のフッサールが大きく変化していく歩みを、現象学的還元の開闢を探求することから始めて、主観に対する世界の与えられ方から世界を規定して、世界存在の自明性に迫ろうとする試みを考察し、ここから、フッサールにおいて初期中期では付随的にしか取り扱われなかった意識の潜在的な地平性が大きなウエイトを占め、世界の自明性の源泉としての地平性が着目されることになる展開過程を分析している。そして、この変化がヒュレーとキネステーズの相関性に関する分析に関しても大きく影響を及ぼし、両者の指示関係と相互制約が地平構造をなしていることが明らかにされる。こうして世界は、単に物の総体としての世界ではなく、地平としての世界へと転換していったとされる。以上のことが、後期（1920年代）の講義録である『第一哲学』、『受動的総合的分析』および『経験と判断』を主要テキストにして分析される。

第五章は、主に『危機』書を中心テキストとして、フッサール最晩年の1930年代主題にしている。フッサールは、まず自然科学とその学を遂行する態度、その学問上の対象としての自然を現象学的に分析する。自然科学の方法は、本来経験には伏在しない「極限理念」を完全性という理想のもとに構築し、さらにそれを逆に経験へと適用させる。そしてそこで構築された客観的で数学的な世界が真の世界であるとされ、逆に基盤のはずであった経験の意義は問われなくなる。こうして自然科学は生活世界をただ一面的のみ主題化すると共に生活世界そのものを隠蔽することとなる。そこで隠された主題としての生活世界を、還元を通して探求するという方途をたどる。このような試みにおいて、最晩年になって明らかにされた世界の「地盤機能」とそれに常に関与し続けている身体機能の共在性へと議論をすすめる、身体的能力上の源泉を明らかにしている。第四章ではキネステーズと感覚与件の両者の体系性を明らかにし、世界地平を議論することに結びつけたが、ここでは、この体系性ばかりでなく、それを支える条件を探る。それが世界の地盤機能であり、その機能と身体機能との連関を身体の立脚点を軸に考察する。ここにおいて、初期において課題として残されたパースペクティブ性の成立と立脚点という問題が最晩年にいたって決着をみたことを示す。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、フッサールの世界論の構築を研究対象とし、それを身体論を通じて明らかにしたものであるが、フッサール自身の錯綜した思想発展の過程を、初期から最晩年にいたるまでの膨大な著書・資料を丹念に読

み解くことによって考察し、彼の世界論の深化の過程と到達点を明らかにした労作である。

とくに、現象学における物の規定の際のさまざまな媒体機能の中でも身体の媒体機能に着目し、知覚における身体的能力と役割を明らかにしたこと、そして身体問題が自己の立脚点の拘束性の問題であることを明らかにしたうえで、この立脚点の拘束性が、超越論的エポケーによって得られた生活世界の地盤機能による拘束であることを指摘したが、この地盤機能への着目によって世界概念を解明したことは、一つの成果である。しかもこれを、フッサールにおいて現象学的還元がデカルト的方法から非デカルト的方法へと転換するとともに、地平構造の分析によって探求の重点が能動的自我の次元から受動性の次元へと移動した過程を克明に辿ることによって明らかにしたことは、高く評価できる点である。

一般にフッサールに関する個別研究は数多いが、本論文のように、フッサールの思想展開の全過程を辿ることによって世界論を浮き彫りにした研究はまだ本格的にはなされていないだけに、貴重な論文である。また、本論文はテキストの綿密な分析からなる緻密な研究である。

しかし、なおいくつかの問題点を指摘しなければならない。まず、文章表現がやや晦渋であるので、読者に理解できるよう伝える努力が望まれる。また内容的には、第四章の成果から、第五章「現象学と世界」において世界概念の本格的考察が期待されるが、しかし、四章までの分析に比べて第五章は主旨は理解できるものの、その構成が整理しきれていない面があり、また考察の掘り下げもやや物足りないものに終わっている。今後の再検討が期待される場所である。

以上のようになお検討すべき点はあるとはいえ、筆者の多年にわたる手堅いフッサール研究の成果として、学界に寄与することが大きく、学位論文として十分に価値あるものと判断される。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。